

中

(十一)

大

里

鈴

慕

菩

介

の

卷

薩

山

時代小説文庫

峠

時代小説文庫 11

大菩薩峠 (十一) 鈴慕の巻 全二十冊

昭和五十七年一月二十日 初版発行

著 者 中里介山

発行者 原 秀行

発行所 株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一―十二―十四

電話東京二六一―五三七五(代表)

〒一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 暁印刷 製本所 本間製本

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600111-7440(0)

時代小説文庫

11



富士見書房

大菩薩峠
(十一) 鈴慕の巻 中里介山

目次

「大菩薩峠」既刊巻別梗概

中里介山

五

鈴慕の巻

二七

Ocean の巻

一五

年魚市の巻

二六

音がないチャンバラ

いいだもも

四三

「大菩薩峠」既刊巻別梗概

中里 介山

一 甲源一刀流の巻

この巻には甲州大菩薩峠の上で、机龍之助が老巡礼を斬ることから発端し、武州御嶽山の奉納試合において龍之助が相手方宇津本文之丞を殺し、その妻お浜を奪うて江戸に走ること、文之丞の弟兵馬が龍之助を仇と覗うこと、龍之助お浜は江戸に落ち着いて芝の新銭座の江川の邸にわび住まいをするうち夫婦の間に郁太郎という子が生まれたが、夫婦争いの末龍之助はお浜を殺し自分には新徴組の間に加わって京都へ走る。

その以前に龍之助は当時三剣客の一人島田虎之助の手腕を見て自分の慢心が一時に碎けて懊悩する。

大菩薩峠の上で龍之助に斬られた老巡礼の孫娘お松、愚直なる与八、龍之助の父弾正、韋駄天のような怪賊七兵衛、淫婦お絹等がそれぞれこの巻から面を現わしてくる。

二 鈴鹿山の巻すざか

江戸をうらぶれて来た机龍之助は、伊勢いせの国鈴鹿山の麓ふもと関せきの宿で駕籠屋かどにいじめられているお豊とよという女を助ける。これがお浜によく似た女であるがためにいい知れぬ因縁を感じる。

三 壬生と島原の巻みぶ しまばら

机龍之助は京都へ来て壬生にぎひの新選組隊長芹沢せりざわを助ける。宇津木兵馬は同じ新選組の近藤こんどう、土方ひじかたにたよる。島原の角屋かくやにおいて龍之助が狂乱する、新選組の内部に大争乱があつて芹沢は暗殺され、近藤、土方が実権を握る。

島原の狂乱から落ちのびた龍之助は、大和やまとの国長谷はさの観音に一夜を宿る。

四 三輪の神杉の巻みわ

長谷の観音からうらぶれた机龍之助は三輪大明神の社家、植田うえだ丹後守たんごのかみの道場へしばし身を寄せる。そこで伊勢国鈴鹿峠の麓で助けたお豊という女が心中の片われとしてこの里に侘住わぢまいしているのとゆくりなく知り合つて恋仲となり、二人は江戸へ行こうと相談する。お豊恋しの野良息

子の金蔵きんぞうという者にさまたげられお豊は途中で奪われ、龍之助は伊賀いがの上野うえのまで行ったがそこで十津川とつかわ天誅組てんしゅうぐみの巨魁きょがい松本奎堂まつもとけいどうに誘われてまた大和へ逆戻りし、お豊に会わんとして二人共に縁がなくて相外れる。

五 龍神りゅうじんの巻

十津川天誅組の一挙も遂に壊滅した。龍之助はその落武者の中にあつて、爆弾のために失明しながら、紀州きしゅうの龍神に落ちのびる。宇津木兵馬は藤堂とうどうの手に属してそれを追いかける。

これより先お豊は勢いやむことをえず金蔵に許してここで温泉宿をしている。そこへ兵馬が仇を訪ねて来る。その人相書によって龍之助が龍神八所のうちのいずれかに隠れていることをさとする。清姫きよひめの帯というのが天に現われて土地の人心を脅かす。お豊は龍之助が護摩壇の奥に隠れて眼を養っているのと巡り会い二人はまた落ちのびようとする。そこへ嫉妬しつとにかられた金蔵が火事を起こし、人を斬り、血まぶれになって追いかけて来たが龍之助に斬られてしまう。龍神村は業火のために盛んに焼かれる。

六 間あいの山の巻

ここで間の山のお玉たま（本名お君きみ）が間の山節を唄うたう。お玉の愛犬ムクが出て来る。龍之助と共

に落ちて来たお豊はここで龍之助を救うために遊女となり、その金と手紙とお君に托したためにお君の身に大難がふりかかる。お君の友達に米友という精悍無比の小男がいる。三人相助け合ってお豊からの使命を大湊に隠れている龍之助のために果たしてやったが、お君は龍之助のあまりに無情なのにいきどおり、泣いてしまふ。

この時お松の主家神尾主膳一行の旗本崩れも伊勢へお参りに来ており、十八文の医者道庵先生も宇津木兵馬も七兵衛と入り込んでいた。

お豊は身代金と手紙とお君に托した後に自害してしまふ。龍之助はとぼとぼと虚無僧姿になって東下りの旅路に出る。間の山のお君は兵馬やお松等と共に船路でこれも東下り。憤激のあまり大活劇を起こした米友はいったん血を見ざる死刑に処せられたが、偶然にも道庵先生の力によって助けられ救われこれもただ一人でびっこ引き東海道を落ちて行く。

七 東海道の巻

伊勢の国から両眼おぼろで東海道の浜松までたどり着いた龍之助、ここでお絹に会ってまた眼が暗くなり、お絹に助けられて東海道を駕籠で下る。

怪盗裏宿七兵衛は薩埵峠でがんりぎの百蔵というこざかしい盗賊と道づれになり、二人腕比べのために龍之助を狙って失敗する。七兵衛は兵馬を導いて三保の松原で仇討をさせようとするのががんりぎが邪魔をして龍之助を甲州路へ連れ込んでしまおうとする。

宇治山田^{うじやまだ}の米友は東海道で旅のつらさをしみじみ味わせられたが、遊行上人^{ゆぎょうしやうじん}に助けられる。三保の松原へ来てお君とめぐり会う。

八 白根山^{しらね}の巻

がんりきの百蔵とお絹とに導かれて、東海道を甲州路へ外れた龍之助は徳間峠^{とくま}の上でがんりきを斬る。片腕を切り落とされたがんりきはお絹と共に逃げ去る。その後で昏倒^{こんとう}している龍之助は山の娘の一行に助けられて甲州奈良田^{ならだ}白根山の麓温泉へ行く。山の娘お徳^{とく}がしきりに介抱する。そこへ甲府勤番^{きんぱん}支配になった神尾主膳の偽物が土地の豪家をゆすりに来るのを龍之助が一槍のもとに突き殺してしまう。

九 女子と小人の巻

米友は江戸へ着いて、お君と共に女軽業の親方お角^{かく}のもとへ身を寄せる。米友が槍の上手なところから黒ん坊の槍使いにさせられて大人気を占めたが、道庵先生に見やぶられてしょげ返りそれが原因でおん出でしまって、江戸の市中を彷徨^{ほうこう}する。

この時分江戸の市中に貧窮組^{ひんきやうぐみ}というものが起こって諸方を食い倒して歩く。米友はその中をくぐって正直な夜鷹^{よたか}のお蝶^{おちやう}という者と知り合いになってその親方のところへ身を寄せる。

お角はお君を入れた女軽業の一行を甲府に連れて行って、一蓮寺いちれんで興行して大当たりをとったが、折助共の襲撃に会って小屋を焼かれ女達をさらわれる。お君の愛犬ムクが猛然として一座を救う。

宇津木兵馬は白根山の山ふところを指して龍之助の跡を追う。お君とムク公は鰍沢かじかざわのほうへ落ちる。

十 市中騒動の巻

江戸では例の貧窮組が横行するし、浪人者が荒あらし廻まわる。米友は本所相生町ほんじよあいおいの箱惣はこそうという金持の家の留守を頼まれて二人の浪人者を追ひ払う。これより先、お絹が甲州から連れて来た忠作ちゅうさくという金掘少年がこの浪人共の後をつけて、芝の三田みたの薩摩邸さつまへ入り込んだことによって近頃市中を騒がす強盗は多くこの薩摩邸から計画的に、押し出すことを突きとめる。

龍之助に片腕を斬り落とされたがんりきは江戸へ来て上野うえのの山下で床屋を開いている。道庵先生がそこへ来て大いに手のうちを表わす。女軽業のお角は甲州から戻って来てがんりきと馴なれ合ってしまう。それを当時根岸ねぎしに住んでいたお絹が嫉妬半分にからかう。そのうちにお絹はお松を連れて甲府勝手へ廻まわされている神尾主膳のもとへ行く。米友が頼まれて用心棒になる。がんりきとお角が巴ともえになつてその後を追いかける。

十一 駒井能登守こまいのとのかみの巻

甲府勝手に廻された神尾主膳は、近いうち勤番支配として駒井能登守という若い者が来て、自分達の上に据わることになるということを聞き、どうしても奸計かんけいを構えてこれを陥れなければならぬという腹を決める。甲府へ新任の駒井能登守は駒木野こまぎのの関でお角を助ける。お絹お松の用心棒としてやって来た宇治山田の米友は、鶴川つるかの河原で雲助共を相手に大活劇を演じてしまう。その結果駒井能登守の仲裁で米友がくりくり坊主にされて走り出す。

笹子峠ささこを越えてお絹とお松とを迎えかたがたやって来た神尾主膳はここでわざと駒井能登守に無礼を試みたり、駒井の一行を追いついて来た、がんりきの百蔵などをかくまったりなどする。

十二 伯耆はろきの安綱やすつなの巻

お君とムク犬は甲州有野村ありのの馬大尽藤原家ふじわらの雇人幸内こうないという者の手によって救われ藤原家の雇人になる。藤原家にはお銀様ぎんさまといって、継母のために大やけどをさせられ、あくまでひがみねじけたお嬢様がある。お君はこのお嬢様のお附つきの人になる。幸内はお銀様の愛人であった。幸内がお銀様に頼んで藤原家に秘蔵の伯耆の安綱の刀を持ち出して甲府の刀剣屋へ持って行くと神尾主膳がそれへ眼をつける。

駒井能登守が藤原家へ馬を見に来る。その時にお君を見て自分の奥方に生き写しなのに心を惹かされる。

その時分、甲府の市中に夜な夜な物すさまじい辻斬りがある。奈良田から甲府へ出て躑躅ヶ崎の古屋敷に籠っている机龍之助の仕業だ。

笹子峠の下でお絹お松の用心棒をおん出た米友が、お君をたずぬべく一人甲府へ入って甲府八幡宮の油さしをやっている。

十三 如法闇夜の巻

お銀様はお君が駒井に愛せられているということを知り、反抗的にちやうど自分の家の財産を目当に結婚を申し込んで来た神尾のもとへ嫁す気になる。

宇津木兵馬は金蔵破りの嫌疑で甲府の牢内につながれていたが、相牢の南条、五十嵐という二人の壮士に連れられて牢破りをし、駒井能登守の邸へ逃げ込む。
お君はとうとう駒井のおもいものになる。

十四 お銀様の巻

幸内は神尾主膳に虐殺される。神尾主膳は伯耆の安綱の刀をさげてお銀様を脅迫する。お銀様

は神尾の暴虐から逃れて必死にしがみついたその人が机龍之助であった。龍之助とお銀様の関係はこの時から始まる。

お君が駒井能登守のおもいものとなったのを米友が憤慨して遂に甲府を立ち去ってしまふ。

駒井の家に隠れて病んでいる宇津木兵馬のためにお松がいろいろと親切をつくす。回復した兵馬は駒井のためにやぶさめの役を勤める。

甲府八幡の境内で官民合同の盛んなやぶさめがある、そこで、神尾の屋敷からバクチのかたに受け取った伯耆の安綱の刀をがんりきの百蔵が持ち出して大活劇を演ずる。

その間にお銀様と龍之助は甲府の裏山からひそかに八幡村へ落ちる。

十五 慢心和尚の巻

龍之助、お銀様の落ちついた小泉の家は偶然にも龍之助の悪縁の女お浜の実家であった。ここで悪女大姉の位牌を見て龍之助がむらむらと悪意を起こして水車番の若い娘を殺してしまう。そしてお銀様に無気味きわまる過去帳を書かせる。

宇津木兵馬は恵林寺の師家慢心和尚というものについて禅要を聞きかたわら甲府の市中に龍之助の動静をさぐる。駒井能登守は神尾の謀計に陥って甲府勤番支配の地位を失脚する。駒井失脚の後のお君は慢心和尚の助けによって向嶽寺の尼寺へ隠される。お松は男装して江戸へ甲府路を帰途についたが、がんりきの百蔵に狙われたのを、南条、五十嵐の壮士に助けられる。

十六 道庵と鰯八ぼらはちの巻

江戸の下谷したやの長者町ちやうじやの道庵先生の隣へ、鰯八大尽というのがすばらしい妾宅しやうたくを構え込んだので道庵がおおいに對抗運動を起こす。

甲府を失脚した駒井は滝野川たきのがわの火薬製造所に隠れて研究に没頭している。兵馬がお君を連れて訪ねて来たが、お君は駒井に洋行の志があることを知って自殺しようとする。甲府に残った神尾主膳はムク犬の皮を生きながら剥はごうとしてかえってムクのために大負傷をする。ムクは慢心和尚のもとへ逃げ込む。

本所相生町の箱惣の家が何者とも知れぬ御老女様と呼ばれる人買い取られて、そこへ例の南条、五十嵐はじめ盛んに浪士が出入する。甲州街道で南条、五十嵐に助けられたお松はここで御老女様のお附きになる。甲府から久しぶりで江戸へ帰った米友は取りあえず道庵先生のもとに落ちつき、以前の馴染なじみのこの家へ来て見て、子供の井戸に落ちたのを助ける。

十七 黒業白業の巻

お銀様が旅費を調達に出かけた後で、龍之助が洪水のために家もろとも押し流されてしまう。神尾主膳は甲府にいたたまれず江戸へ出て染井そめいの化物屋敷に隠れる。笛吹川ふえかきに押し流された龍

之助がムクのためにふと救われてそれから江戸へ落ちて神尾の化物屋敷へ籠る。ここにはお絹も来ている。お銀様も龍之助と共に来ている。神尾は龍之助をそそのかして吉原へ遊びに行く。兵馬も吉原へ入り込んだが、遂におぼれかけてお松に苦勞をさせる。吉原へ歩兵隊が乗り込んで暴れる。その騒動中を道庵の乗るあんぽつによって抜け出した龍之助は本所弥勒寺橋の長屋の中で米友と侘住まいをし、米友は病人である龍之助を看病しているが、この病人が夜な夜な辻斬りに歩く形跡を見て、舌を巻いて地団駄を踏む。

駒井能登守の姿を江戸湾の船の中で見たというものがある。

十八 安房の国の巻

この巻から安房の国清澄山の茂太郎と盲目法師の弁信というものが現われてくる。

女輕業の親方お角は奇童清澄の茂太郎を買いに房州を目指して出かけたが、木更津沖で難船に会いその時分房州の洲崎に造船場を設けて一人それに没頭していた駒井に助けられる。この暴風雨の責任を自分の過ちでもあるように受け入れた弁信は、罪障消滅のために清澄山を下ってしまふ。山で悪戯をしたために追われた清澄の茂太郎は駒井の陣屋の縁の下へ逃げ込む。それを連れて帰ったお角が両国橋で山神奇童清澄の茂太郎と看板を挙げて大当たりをとる。